

“The Gentle Boy” 一考察 —Ilbrahim の実像をめぐって—

野 呂 浩

I

Nathaniel Hawthorne は、大学卒業後、ニュー・イングランドの歴史に関する新聞、雑誌、本等の記録を片っ端から読み耽り、そうした結果として、何編かの地方物語が書かれた。たとえば、“Roger Malvin’s Burial,” “Endicott and the Red Cross,” “The Gray Champion,” “The Gentle Boy” 等である。

今回、分析対象とする作品は、“The Gentle Boy” であるが、これは、1832 年版の *The Token* 誌に初めて掲載されたが、その後、字句等の削除がなされて、Nathaniel Hawthorne の最初の短編集 *Twice-Told Tales* に再録された。さらに、“A Thrice-Told Tales” という副題までつけた独立版まで出版された物語である。

削除箇所に関する研究は、Seymour L. Gross の “Hawthorne’s Revision of “The Gentle Boy” ” がある⁽¹⁾。文学作品を仕上げていく過程での削除で、テーマ等の重要な変更を意味する削除ではないとする研究結果に特に大きな異論を挟む余地はなさそうである。さらに、G. Harrison Orians の優れた考察、“The Sources and Themes of Hawthorne’s “The Gentle Boy” ”⁽²⁾ も、登場人物のモデル、テーマ等に関して貴重な研究結果を明らかにしている。

同時代の詩人であり、Nathaniel Hawthorne の友人でもある Longfellow は、この “The Gentle Boy” こそ、Nathaniel Hawthorne の最高傑作であると述べているが、それは飽くまでも、母親の強さ、愛情等の人間的な絆を見事に描いているという意味においてであろう⁽³⁾。

また、この物語は、後に Nathaniel Hawthorne が結婚することになる Sophia Peabody が特に好

んだようであるが、その理由は、その当時の読者がそうであったように、読者の涙を誘うような、悲しい物語の主人公 Ilbrahim ゆえであろうが、余程注意深く読まないと奥に秘められているであろう実像に手が届かない Nathaniel Hawthorne の作品を、家庭的な愛に恵まれない一少年のお話しとして片付ける訳にはいくまい。

物語の主人公である優しい少年 Ilbrahim のクエーカー教徒である父親はニュー・イングランドのピューリタン達によって処刑され、母親もクエーカー教徒であるために、同じピューリタン達によって荒野に追放される。このような悲惨な状況の中で、肉親のごく自然な愛情を全くといっていいほど経験することなく生きなければならない可愛そうな、悲劇の主人公 Ilbrahim なのに、何故に彼は心優しいのか、彼の置かれている残酷な状況とは一体何なのか、また、そのような状況をもたらす根本原因は何なのかという問題を読者に抱かせる。

今回の考察では、アメリカ文学研究家のこれまでの研究成果も踏まえながら、作品をもう一度精読することは当然のことであるが、17 世紀ニュー・イングランドの歴史、並びに Nathaniel Hawthorne の家系の歴史等との絡みも検討することによって、主人公 Ilbrahim の実像に迫りたい。

II

今回取り上げる物語の粗筋を簡単に述べるならば、主人公であるクエーカー教徒の優しい少年 Ilbrahim の父は、1656 年に、寛容な心など全くなくしてしまったピューリタン達によって処刑される。主人公 Ilbrahim は、父の墓場にしがみついたように涙しているところを、異質な存在にも理

解のあるピューリタンの Pearson 夫妻に発見され、乞われて、彼等の子供として育てられる。同じ信仰共同体であるピューリタン達の恐ろしく冷たい視線を浴びながらも、Pearson 夫妻は Ilbrahim をある時おもいきって自分達の教会の礼拝に連れて行く。そこで予想だにできなかったことだが、とっくに荒野で死んでしまったと思っていた Ilbrahim の母親 Catherine がその教会に現われる。ピューリタンの牧師が説教した後、これも普通は考えられないことではあるが、彼女はピューリタンの残酷さを激しく呪い、会衆を震え上がらせるような説教をする。しかし、彼女は自分の子供 Ilbrahim の養育を Pearson 夫妻に委ねて、自分の信じる宗教、クエーカー教のために命をすてる覚悟で、一人で再び荒野に戻って行くのである。Ilbrahim はやがて心の平静を取り戻し、Pearson 夫妻の家庭で幸せそうな日々を送るようになるが、あるピューリタンの子供が木から落ちて怪我をした時には献身的な看護をしてその子供の健康を回復するのに重要な役割を演じる。しかし、残酷にも、あるとき、ピューリタンの子供達に取り囲まれて棒で殴られ石をぶつけられる乱暴を受ける。しかし、その時、かつて看病してあげたお蔭で元気になったその少年が、自分の手をとれと一見優しく語る言葉にひかれて近づくと、その小賢しい小悪魔が待ってましたとばかりに、持っていた棒で Ilbrahim の口元目がけて渾身の力を込めて振り落とすのであった。もちろん、Ilbrahim の口元からは血がほとばしり出て危うく死ぬところであったが、近くの大人たちにかろうじて助けられる。やがて、肉体的には回復に向かうが、精神的に癒し難い致命的な傷を負ってしまう。そして、これもまた、誰もが予想しなかったのに、英国王のクエーカー教徒迫害停止のメッセージを携えて現われた母親に抱かれながら優しい Ilbrahim はこの世を去るのである。Tobias Pearson はピューリタン側に問題を感じたのか、クエーカー教に転向する。そして、何年後か、Ilbrahim の母親も亡くなるが、以前迫害していた者たちも彼女の葬列に加わる場面で物語が終わる。

この作品に関する優れた研究も多いが、その一

つは、Seymour L. Gross の Hawthorne's Revision of "The Gentle Boy" である。1832 年、*The Token* 誌に初めて掲載された作品だが、後に字句等の修正がなされて、Nathaniel Hawthorne の最初の短編集 *Twice-Told Tales* に収められる。それゆえ、誰もがなぜそうした削除等をあえて行ったのかに関心を持つ訳だが、そうした問いに答えるのが、彼の論文である。

彼の論文では、削除をしたのは、結局、ピューリタンとクエーカーのどちら側に特に責任があるというような描き方をしていると解釈されそうな箇所等を削除し、どちらにもそれなりの責任があるようにバランスをとったとの説明を基本的に受け入れてよかろう。ただし、そのような意味を持つ削除であったとしても、物語の内容を全体的に眺めるならば、どちらかと言えば、クエーカーの側に、より惨めな悲劇性を認め、同情的に描かれていると読みたくなる。肉体的な傷と同時に、消しさることの出来ない精神的なショック故に結局死んでしまうのは、クエーカー少年の Ilbrahim である。その子の母親 Catherine は、息子の優しい霊が天から降りてきて母親に本当の宗教を教えたせいか、激しい性格も柔らかくなり、彼女を取りまく人々の態度も変わってきた。そして、母親が亡くなった時には、かつては激しい迫害者だった人達も葬列に加わり、息子の墓の傍らに葬ったことなどもそうした読みをしなくなる箇所である。勿論、ピューリタン側がそのように変化したとも読めようが、それは飽くまでもクエーカーの母親の生きざまの変化が先であり、しかも、父親の墓近くに、母子を埋葬したとは描かれていない。さらには、Ilbrahim を助けて、自分の子供として育てたピューリタン Tobias Pearson が最終的にはクエーカーに改宗したことなどをも考えるならば、"Hawthorne sides with the Quakers." という Harry Levin の主張⁽⁴⁾ を支持したくもなる。

クエーカーの問題点は、狂信的な信仰ゆえに現世の義務を無視し、人間の自然な愛情を破壊することである。Ilbrahim は、喜びにも苦痛にも異常な程敏感で、ちょっとした非難でも精神的に落ち込む性格である、それに、Ilbrahim をもっとも憎

むのは子供達で、彼の口から血がほとばしるほど殴られてあわや本当の殉教者となりかけた時に助けたのは大人たちであるとの Gross の指摘はその通りである⁽⁵⁾。Gross は最後に、この作品は結論的には、不寛容と迫害の勝れた研究であり、悪の存在がリアルなものであることを描いていると結論づけている。しかし、なぜ、宗教迫害を敢えて取り上げているのか等の背景、Ilbrahim の優しさの奥に見え隠れする苦悩等をさらに検討するならば、もう少し別な実像がよく見えてこよう。

III

最初の版の何箇所かを削除したことについてはそれほど大きな意味がないとしても、やはり、まず、作品の素材をどこから得ているのかということも解決しておかなければならない。G. Harrison Orians の *The Sources and Themes of Hawthorne's "The Gentle Boy"* という論文が、こうした問題を解決するのに大変役に立つ。

G. Harrison Orians の大変緻密な研究によると、Nathaniel Hawthorne が“The Gentle Boy”執筆に際しては、彼の生まれ故郷であるセイラムの図書館から借りた William Sewel 著の *History of the Quakers* からかなり借用していることが分かる。1656 年から 1660 年までのボストンでの出来事は、Sewel だけでなく、George Bishop の *New England Judges* (1703)、Hutchinson の *History of Massachusetts* (1764)、William Hubbard の *General History of New England* (1815)、Neal の *History of New England* (1720)、Morton の *New England Memorial* (1669)、Morse と Parish の *Compendious History of New England* (1840)、そして、Felt の *Annals of Salem* (1827) 等にも記録されており、Nathaniel Hawthorne はこのような書物を全部参考にしたようである。つまり、クエーカー教徒迫害の時期、処刑されたクエーカー教徒の犠牲者、クエーカー教徒を荒野に追放した事実、さらには、Endicott 知事がクエーカー教徒に対して決定した無慈悲な措置等はこうした書物の内容を元にして組み立てられた訳である。

Pearson 夫妻のモデルも、Hutchinson や Sewel の記録に見られる。解放されるときに 20 回ものむち打ち刑を執行されたのが、Pearson と Judith Brown であった。また、Sewel と Bishop の書物には、クエーカー教に改宗したピューリタンの例もいくつかあったことが記述されているので、Tobias Pearson のクエーカー教への転向が、作家 Nathaniel Hawthorne のクエーカー教への同情を示すという風に読みたくなる可能性を既に指摘したが、この転向は歴史的事実に基づいて描かれていることをも踏まえなければなるまい。

Ilbrahim の父親は、1660 年にボストンで処刑された、Robinson と Stevenson がモデルと思われる。また、Ilbrahim の母親 Catherine のモデルも、Sewel や Hutchinson の書にある。“The Gentle Boy”の物語で、Catherine が、自分の牢獄の窓のところを通る知事を激しい言葉で罵ったとのくだりは、Hutchinson の Mary Prince を描いた文章そのものを借用している。さらに、トルコに一時的に避難した Mary Fisher、独房で拷問を受けた Catherine Evans、荒野に追放された Mary Prince、さらに、クエーカー教徒が講壇で説教した例なども Sewel ののものにあるが、それらを参考にして Ilbrahim の母親を創造したものと思われる。

また、クエーカーの女性が荒野に追放される歴史上の具体的な実例は Hutchinson, Hubbard, Neal の歴史書にも見受けられる。Sewel は、Elizabeth Horton と Joan Broksup について説明しているが、特に Elizabeth は、英国から戻って来た後に、狼、熊等の野獣が徘徊する荒野に再び追放されたとあるので、こうした内容を作品に取り入れているのは明らかである。

このように眺めてくると物語中の事件とすべての人物には何らかのモデルがあり、一体、作家 Nathaniel Hawthorne は何を創造したのかと思いたくもなろう。母親の Catherine に人間的な愛情を付与したのは勿論 Nathaniel Hawthorne である。主人公 Ilbrahim のモデルは全くないわけではなく、おそらく 11 才の少女 Patience Scott が当局に厳しい尋問を受けた事件をあるいは参考に

したかも知れないが、内容的に直接結び付く訳でもないで、Ilbrahimこそ Nathaniel Hawthorne の唯一の創造人物であると断定してもよい。

G. Harrison Orians は、Nathaniel Hawthorne の先祖にはクエーカー教徒迫害に加わった者もいるので、物語にあるような内容が伝えられてきたのかも知れないとの貴重な指摘の一文もあるが、その視点からの詳細な分析は特になされていない。

G. Harrison Orians 自身が、結論的には、この作品のテーマは、Nathaniel Hawthorne の作品によく見られるように、改革が結局は、共同体よりは個人の願望を達成する愚を指摘しているとか、共同体からの孤立の問題を扱っているとか、さらには、Nathaniel Hawthorne は社会のアウトカーストが好きであるとか、最後には、事実とフィクションが適当に混じる良い物語であると述べている点などは、一つ一つの解釈は妥当性があっても、全体を眺めた説得力ある解釈とは言い難い。

Nathaniel Hawthorne が借りた様々な書物にある歴史的事件、人物をモデルとして描き出した部分は、歴史的事実と極端に異なる訳ではないので、特に問題視する必要はなかろう。また、母親に人間的な愛情を付け加えたのも、特にそのことが中心テーマとも思われないので詳細な検討は必要あるまい。

しからば、Nathaniel Hawthorne 自身の筆により創造された主人公 Ilbrahim は綿密な分析をしなければならず、また、Nathaniel Hawthorne 自身の先祖がクエーカー教徒迫害に深く関わった歴史もあるので、主人公の実像に迫るには、そうした歴史にも分析のメスを入れなければなるまい。

IV

それでは、まず Nathaniel Hawthorne の家系の歴史を検討してみよう。1630 年に英国からアメリカに渡って来たアメリカ初代の先祖は、William Hathorne でクエーカー教徒を迫害したことで歴史に名を残した人物である。そして、彼の息子 John は、1692 年の魔女裁判の判事としてこれまた歴史に汚名を刻んだ先祖である。John に迫

害された English Philip 等は、Hathorne (Nathaniel Hawthorne が、大学卒業後に w を加えた。)を呪って死ぬが、皮肉にも Philip の娘の一人と結婚した John の息子がいることも歴史の事実であり、Nathaniel Hawthorne 自身は勿論こうした歴史を熟知していたのである⁽⁶⁾。結局、John Hathorne より 4 代後の Nathaniel Hawthorne は、迫害側と、迫害される側のいずれの血も受け継いでいることになる。

そして、Ilbrahim が Nathaniel Hawthorne の分身であるとすれば（この点に関しては後ほど詳しく検討する。）、Ilbrahim が自分の父親が首吊りの丘で処刑されて埋葬された墓場こそ自分のホームと呼ぶのは、父親を殺害されたゆえのごく自然な悲しみの表現とだけ解釈したくなくろうが、Nathaniel Hawthorne の先祖の歴史との絡みで眺めるならば、そのホームという意味が、自分の生まれてきた家系の迫害の歴史のホームと重なるとも読める。そうすると、Ilbrahim の涙は、Nathaniel Hawthorne の涙とも映るのである。

また、幼くして父親の死に直面させられた Nathaniel Hawthorne 自身の辛い体験が多少は反映しているかも知れない。Nathaniel Hawthorne が 4 才の時に、船長であった父親が国外で亡くなり、母親はその後、生涯喪服に身を包み、食事さえも自分の部屋で一人でとったと言われている。そうするならば、確かに、母親の愛情は勿論のこと、家庭的な暖かさに恵まれなかった Nathaniel Hawthorne の幼い時からの寂しい体験が反映しているとも言えよう。

Hawthorne 家アメリカ初代の William Hathorne は、クエーカー教徒の女性 Anne Coleman と彼女の 4 人の友にむち打ち刑を命じた判事のひとりであったとする、Sewel の記述を、Nathaniel Hawthorne が読まないはずはなかろう。このような、クエーカー教徒に対する先祖の残虐窮まりない仕打ちを踏まえて物語を読むならば、いくら残酷な迫害にあっても優しさを失うことのない一人の女性の命も犠牲にされたというくだりなどは、このような歴史的事件を暗示していると考えるのが自然ではなかろうか。この情け容赦のない厳し

い迫害者 William Hathorne こそ、作品に描かれている時代にクエーカー迫害に奔走した人物であることは紛れもない歴史的事実なのである。

さらに、主人公の Ilbrahim が、かつて介抱した少年に、自分の口から血が飛び散るほど棒で殴りつけられて致命傷を負う訳だが、この狂暴な性格の子供は、大人になってからは旺盛な活力と特異な能力を発揮することになると述べられている。それが具体的には何なのかは特に説明はないが、物語の処刑事件は 1659 年のことであるが、30 数年後の 1692 年のセイラム魔女裁判でクエーカー教徒を何名も処刑することに同意した John Hathorne の旺盛な活力と特異な能力を思わせる子供である。つまり、John Hathorne の子供時代の姿で、すでにその頃から、無慈悲な迫害心と相手に残酷な仕打ちを平気とする特徴がある姿を描いているのである。また、John Hathorne の妻の母親はクエーカー教徒であったことも思い起こせば、話が実にうまく噛み合うではないか。恩を感じるべきクエーカー側を迫害することに奔走する芽が見事に描かれているではないか。セイラムの魔女裁判は誤りであったとの告白文が、関わった陪審員らの署名入りで公にされたが、それに John Hathorne の名はなかったことも Nathaniel Hawthorne は知っているのである。

Nathaniel Hawthorne は、大学卒業後の 12 年間程は、自分の家の一室に閉じ籠るが、この部屋は、父親を 4 才の時に亡くした、Nathaniel Hawthorne が叔父の家に世話になり、叔父の家族と一緒にベットさえ共有しなければならなかった因縁の部屋である。従って、主人公 Ilbrahim が Nathaniel Hawthorne の影を宿す人物とすれば、信仰も異なる別な家族である Pearson 家に世話になるのもこうした文脈で読むと解けてくると言おうか、Nathaniel Hawthorne の苦い体験が反映していると読んで大きな誤りはなからう。

この重苦しい部屋に閉じ籠って、歴史書等を次から次にと読み、一般的な歴史よりは、セイラムの魔女裁判に特に関心が深かったようである。しかも、その忌まわしい部屋から、間近にある William Hathorne, John Hathorne などの墓場を眺

めていた事実を知るだけでも、今回扱う作品の背景が理解出来よう。

“The Gentle Boy” は、1659 年 10 月 27 日のクエーカーの処刑から（作品では 1 人ではあるが、実際の歴史では 2 人である。）、1661 年 9 月の Charles II のクエーカー教徒迫害停止の勅令（Nathaniel Hawthorne は、作品の中では Ilbrahim が死ぬ冬までとしている。）までの歴史を土台として描いているが、登場する人物名は実名ではないのは当然のことである。何も Nathaniel Hawthorne の先祖名だけではなく、たとえば、迫害時の知事は、John Endicott であるが、作品中には、ただ狂暴な判断を下す知事であったと説明されているだけで、実名は描かれていないのである。しかし、普通の読者であれば、それが誰であるかはすぐに分かる。つまり、読者の歴史的知識を前提とした描き方をしているのである。同じような意味であらゆる読者がすぐに理解出来るかどうかは断定出来ないが、William Hathorne と John Hathorne の 2 人の名前は描かれていないが、時代背景と内容を見る限り、2 人の存在は確かである。

Nathaniel Hawthorne は、17 世紀ニュー・イングランド史の歴史的事実である醜い一断面を描く物語の中に、Nathaniel Hawthorne 自身の先祖の呪うべき悪行も、上手に潜ませているのである。

V

しからば、殆どが Nathaniel Hawthorne の筆で創造された主人公 Ilbrahim をじっくりと眺めて見よう。

Ilbrahim の特徴を示す説明を作品の中から拾ってみると、処刑された父親の急こしらえの墓場で発見された時の様子は、わずか 6 才位なのに、極度の悲しみに耐え切れない様子。自分の家に連れて行き、暖かい食事を与えようとする Tobias Pearson が話しかけても、父の墓こそ自分のホームであると言い張り、涙し、墓場を離れようとせず、まるで、土の下の冷たい心臓の方が生きている人の胸にあるどんな心臓よりも暖かく思われる様子であった。しかし、とうとう、少年は、Pearson

夫妻と一緒に行くことに同意し、立ち上がるが、か細い足がよろめき、頭もめまいをおこし、縛り首の木に寄りかかって体を支えるほどであった。このような場面だけではないが、作品に描かれる主人公の特徴を纏めて言えば、あまり多くを語らない、繊細過ぎるほどの神経の持ち主ゆえ、刺を含んだ言葉などを敏感に察知する、仕返しをしない、感じやすい精神に加えられた傷の方が、肉体のそれよりも遙かに重くなる、社交的でない姿等が浮かび上がってくる。

クエーカー教徒と言えば、内なる光を受けてどんな迫害をも恐れずに突き進む信者であり、主人公の処刑された父親、荒野に追放された母親はそうした人間である。

優しい少年 Ilbrahim を眺めてみると、誰に対してもフレンドと呼ぶ以外に、クエーカー教徒らしい特徴は何も見当たらない。わずか6才に過ぎないのだからとも思いたくなく、作品の中では、子供たちは皆大人の特徴を内に豊かに宿す存在として描かれている。

Ilbrahim の、墓場にしがみついた姿、非社交的で、繊細で、内向的な特徴等は、過去の歴史に囚われるが、およそ迫害心などとは無縁でやさしく、社交を好まない Nathaniel Hawthorne の性格とそっくりである。

偶然にこのような性格描写がなされたとは到底考えられまい。Nathaniel Hawthorne という作家は、入念に登場人物の性格描写を仕上げていく作家であることを忘れてはならない。

Nathaniel Hawthorne は、ピューリタンの子孫であるが、家系の歴史をみれば、例えば、John Hathorne の妻の母親はクエーカーであるし、両方の血と迫害する側と迫害される双方の恐ろしい歴史が混在していることも既に指摘済みである。

Ilbrahim は心優しく、ピューリタンの子供であつても怪我をした時には親身に看病をするし、どちら側をも特に憎み、敵視するわけではないので、クエーカー教徒らしくもなく、ましてや、ピューリタンらしくもない。とすると、実は、双方の血と歴史を背負う存在を認識するが、どちら側にも帰属することを選択しない Nathaniel

Hawthorne の姿を、Ilbrahim の姿に読み取ることが出来よう。そうすると、その Ilbrahim 少年が、後の大人の治安判事 John Hathorne を思わせるような特徴を備えたピューリタン少年の一撃で致命的な傷を受けて死んでしまう結末はいかにも意味ありげではないか。

VI

今までの考察から分かるように、基本的には、歴史的事件を淡々と扱っているようでも、著者自身の家系の歴史を絡ませていることは間違い無い。しかし、如何に歴史的事件を作品化するといつても、Nathaniel Hawthorne は歴史家ではなく作家であるので、自分の見解というようなものが、もちろん露骨に描くことは彼は絶対にしないが、作品のなかの文章、何気ない語などに現れるものである。

人間が本来備えている自然な衝動、欲求が、長い間、厳しい信仰などによって抑圧されると、心の安定を欠き、その解消のためにスケープゴートを必要とする。魔女事件等はそうした現象であるとの説は卓見であろう⁽⁷⁾。だがしかし、Nathaniel Hawthorne は、事件そのものの真相を歴史的、心理学的に分析した書物を執筆しているのではなく、過去の歴史上の事件や人物に彼なりのリアルな肉付けをしたドラマを読者に提示しているのである。とするならば、どうしても、どこかに、Nathaniel Hawthorne なる見解というものが潜んでいるはずである。もう少し、作家の生の声が伝わってくるような記述を見付け出すことは出来ないだろうか。

そういう表現を Nathaniel Hawthorne の作品に見い出すことは非常に困難であるが、今回、分析した作品の中に、「宗教的憎悪は猛毒」⁽⁸⁾であるとの表現があるが、これこそ作家 Nathaniel Hawthorne の、アメリカの宗教迫害史に対する歴史観が集約されている言葉ではなかろうか。猛毒のさらなる定義は別にないが、物語全体が、そうした猛毒のリアルな定義、ドラマであることは明らかである。その猛毒ゆえに肉親同士の人間的繋がりが切り裂かれ、無慈悲な処刑をし、墓場が増

えるのである。この猛毒という一語ですばり、作家 Nathaniel Hawthorne は、自分の先祖の醜い歴史と 17 世紀アメリカの宗教迫害史を特徴づけているのである。

しかれば、主人公 Ilbrahim がなぜ死ぬのか、Nathaniel Hawthorne の分身でもある彼が死ぬ場面はどのように解釈出来るのか。Nathaniel Hawthorne が自分は 25 才までは生きられないのではないかと、早死を恐れていたとかも言われるが、物語全体の流れから見るとそうだが、特にこの物語に投影されていると読むのは無理であろう。

主人公 Ilbrahim は、これまでの考察からすれば、当然、その姿は Nathaniel Hawthorne であり、4 代前の先祖である John Hawthorne の子供の姿ともいえる人物の無慈悲な猛毒の一撃で命を失うのである。ならば、自分の先祖の猛毒性をのみ主張しているのであろうか。否、この猛毒はなにも Nathaniel Hawthorne の先祖に限ったことではない。何人も消し去ることの出来ないアメリカ初期の歴史的事実なのである。そうすると、Nathaniel Hawthorne の先祖の歴史とアメリカ史の双方に内在する猛毒によって命を絶たれる訳である。

従って、この物語を、単に Nathaniel Hawthorne の家系の罪を償う贖罪物語とだけ解釈するのは無理であろう。それに、主人公が猛毒で死に追いやられる毒性を強調しているだけでなく、むしろ、その死によってそうした猛毒の歴史を終わらせようとする響も感じる。主人公が、母親に抱か

れて息を引き取る時の、「自分は幸せだよ」という言葉は、母親の温もりを感じながら死ねる幸だけでなく、今までの考察からこの重要な場面を見つめ直すならば、自ら猛毒の毒によって死に、猛毒史の終焉役を演じる幸の今はの告白とも理解出来よう。今回の研究で、優しい少年の主人公 Ilbrahim の実像を少しは覗き見出来たのではなかろうか。

注

- (1) Seymour L. Gross, “Hawthorne’s Revision of “The Gentle Boy,” *American Literature*, 26 (1954), pp. 196-208.
- (2) G. Harrison Orians, “The Sources and themes of Hawthorne’s “The Gentle Boy,” *New England Quarterly*, XIV (December, 1941), pp. 664-678.
- (3) B. Bernard Cohen ed., *Hawthorne: The Critical Heritage* (London: Routledge & Kegan Paul, 1970), p. 68.
- (4) Harry Levin, *The Power of Blackness Hawthorne, Poe, Melville* (The Ohio University Press 1980 Athens) p. 54.
- (5) Seymour L. Gross, pp.204-208.
- (6) *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, Vol. VIII. *The American Notebooks* (Ohio State Univ Press, 1962), p. 75.
- (7) Marion L. Starkey 『少女たちの魔女狩り』(平凡社, 1944), p. 48.
- (8) *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, Vol. IX. (Ohio State Univ Press, 1962), p. 134.